小杉町小杉流通業務団地内No.１遺跡

発掘調査報告

1992年３月

富山県小杉町教育委員会

序

小杉町南側に連なる緑豊かな射水丘陵には、これまでの調査によって多くの遺跡が存在する地域として知られています。

この丘陵に北陸自動車道小杉インターチェンジが早くに建設され、その後の道路網の整備により、射水丘陵周辺では各種の公共事業をはじめ、近年ゴルフ場の建設や会社の敷地造成など民間の大型開発事業が相次いで進められ、環境も大きく変化しつつあります。

このような状況の中で私達は、国民共有の財産である文化財を末長く後世に伝えるため、埋蔵文化財の保護と開発との調整に努めています。

このたび、株式会社伸光の建設に先立つ発掘調査によって、弥生時代末から古墳時代初めにかけての方形周溝墓を発掘しました。周辺の平野部に接する丘陵上には、同時期の集落や墳墓・古墳が多く所在しており、この地域の当時の生活を探る上で貴重な資料を提供しました。

本書は、調査の内容をまとめたものですが、当地域の歴史を理解する上で、少しでも役立てば幸いです。

今回の調査において、多くの方々からご援助を賜りました。ご協力いただいた関係者や諸機関の方々に厚くお礼申し上げます。

平成4年3月

小杉町教育委員会
教育長　川　腰　豊　一

例　　言

1．　本書は、富山県射水郡小杉町下条(げじょう)515番地他に所在する小杉流通業務団地内№1遺跡の発掘調査報告である。

2．　調査は、工場増設に先立ち、株式会社伸光の依頼を受けて、小杉町教育委員会が調査主体となり行った。なお、調査にあたり山武考古学研究所の調査協力を得た。

3．　調査事務局は、小杉町教育委員会に置き、社会教育課主任金山秀彰が事務を担当し、社会教育課課長荒川秀次が総括した。また7月からは生涯学習課課長盛田寿子が統括した。

4．　調査担当者及び調査期間、面積は次のとおりである。

確認調査：平成元年9月25日～9月26日		小杉町教育委員会	納谷守幸 原田義範
試掘調査：平成2年12月8日	約1,700㎡	〃	上野　章
本 調 査：平成3年6月10日～6月26日	約　900㎡	山武考古学研究所	桐谷　優 荒井英樹

5．　本書の執筆は上野と荒井で分担し、編集を荒井が行った。なお文責は文末に記した。

6．　実測図中の北は磁北である。

7．　遺構番号の分類記号は次のとおりである。

ＳＤ：溝、ＳＫ：穴、ＳＸ：不明または墓

目　　次

Ⅰ　調査に至る経過と調査の経緯 …… 1
　1．調査に至る経過 …… 1
　2．調査の経緯 …… 1
Ⅱ　遺跡の位置と考古学的環境 …… 2
Ⅲ　調査の概要 …… 4
　1．確認調査 …… 5
　2．試掘調査 …… 5
　3．本 調 査 …… 5
Ⅳ　検出された遺構と遺物 …… 6
　1．遺　　構 …… 7
　2．遺　　物 …… 10
Ⅴ　まとめ …… 11
引用・参考文献、写真図版

Ⅰ　調査に至る経過と調査の経緯

1．調査に至る経過

本遺跡は、昭和48年12月に富山県教育委員会により、小杉流通業務団地及び周辺地区の遺跡分布調査によって発見され、遺物散布地（須恵器）として報告されている。

また、昭和57年４月には富山県教育委員会により、遺跡内を通る道路改良工事に先立って路線内の発掘調査を実施し、縄文時代中期の穴と共に縄文土器・石斧が出土している。

さて、小杉町下条五歩一地内の丘陵に株式会社伸光の工場新設計画が小杉町に具体的に提示されたのは、昭和63年８月である。同社は主に金属製品に塗装を行なう加工工場であり、これまで大島町を中心に工場や倉庫が５箇所に分散していた。このため、生産性の向上と処理管理の円滑化などを図るために小杉町で統合新工場を建設することとなった。その敷地面積は約55,000㎡であり、平成元年10月に新工場が稼働している。

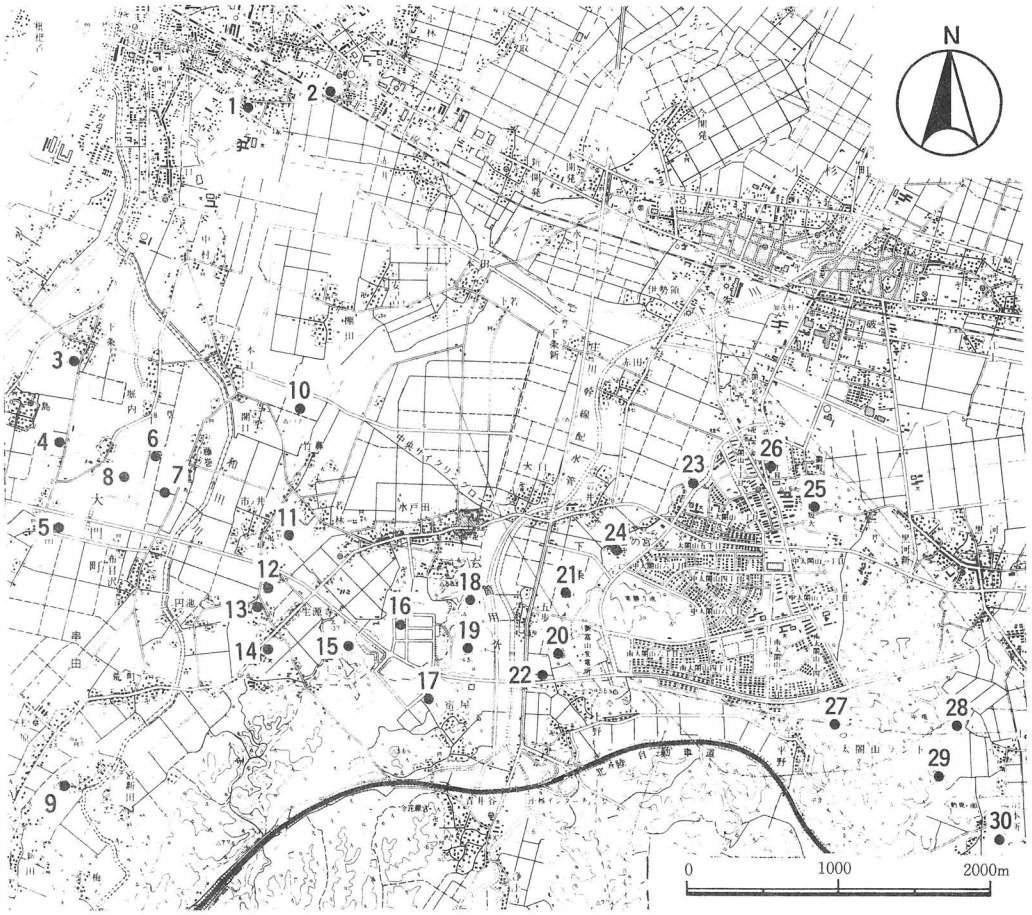
この間、昭和63年９月から平成元年２月にかけて小杉町と会社との間で、開発にかかる法的規制や富山県に対しての開発行為届出等について検討が進められた。小杉町教育委員会では、建設予定地に周知の小杉流通業務団地内遺跡群№１遺跡が含まれていたため、その取り扱いを協議した。周知の遺跡は第一期工事から除外することで工事との調整が図られた。また、昭和63年12月には予定地を対象とした遺跡の分布調査を実施したが、山林のため新たな遺跡は発見されなかった。しかし、未発見の遺跡の存在する可能性が高いことから遺跡の所在確認の必要性が合意された。この遺跡の所在確認は、平成元年９月に至ってわずかに残った未造成地において実施したにすぎなかった。

平成２年５月に至って製品の増産発注に対応するため第二期工事の工場増設計画が本格化し、小杉町に示された。工事予定地には、第一期工事から除外された遺跡が含まれることから調査依頼があった。小杉町教育委員会では、平成２年12月に工事にかかる約1,700㎡を対象として試掘調査を行なったところ、遺構の存在が明らかになったため工事に先立つ本調査が必要となった。

しかし、小杉町教育委員会では多くの調査をかかえ、早く対応できないことから民間の調査機関に応援を求め、平成３年６月に本調査を実施することとなった。　（上野）

2．調査の経緯

調査は、株式会社伸光の依頼を受けて、小杉町教育委員会が主体となり、同教育委員会の調査協力依頼を受けて、山武考古学研究所が実施した。調査期間は、平成３年６月10日から６月26日の延べ17日間で、面積は、第二期工事にかかる約1,700㎡のうち、試掘調査で遺構が確認された東側の約900㎡を対象とした。当初調査対象面積は約500㎡であったが、方形周溝墓の可能性が指摘されたことから、18日、調査区を約900㎡まで拡張した。しかし拡張部分からは、遺構と思われるものは何も検出されなかった。　（荒井）



第１図　位置と周辺の遺跡

第１表　射水丘陵の遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	No.	遺跡名	所在地	No.	遺跡名	所在地
1	八塚A	大門町	11	市ノ井	大門町	21	山王宮古墳	小杉町
2	八塚B	大門町	12	生源寺新十三塚古墳	大門町	22	南太閤山Ⅰ・Ⅱ	小杉町
3	島前田	大門町	13	大塚古墳	大門町	23	囲山	小杉町
4	島鉾田	大門町	14	生源寺新	大門町	24	日ノ宮	小杉町
5	牧田	大門町	15	小杉丸山	小杉町	25	二ツ山古墳	小杉町
6	布目沢北	大門町	16	小杉流団No.3・6・7	小杉町	26	中山中・中山南	小杉町
7	布目沢東	大門町	17	小杉流団No.19	小杉町	27	上野赤坂A	小杉町
8	掘内	大門町	18	小杉流団No.1	小杉町	28	土代A	小杉町
9	串田新	大門町	19	五歩一古墳	小杉町	29	石太郎C	小杉町
10	縄田	大門町	20	変電所西古墳	小杉町	30	草山B	小杉町

Ⅱ　遺跡の位置と考古学的環境

小杉流通業務団地内№1遺跡は、富山県射水郡小杉町下条515番地他に所在する。この地域は、富山県のほぼ中央に伸びる射水丘陵の北端にあたり、直下には射水平野が開け、下条川が富山湾に向かって北流している。本遺跡は、この丘陵と平野の接する位置にあり、標高約37ｍの丘陵上に立地する。

小杉町は、中央に北陸自動車道が東西に横断し、東は新掘川、西は県道新湊・婦中線、南は射水丘陵、北は国道８号線によってほぼ区画される。古くから米と金属と焼き物（小杉焼）によってその生計を支えてきた地域で、近年ではジャパン・エキスポ富山'92の開催が県民公園太閤山ランドにおいて予定されている。

この小杉町を南北に二分すると、北の平野部と南の丘陵部に大別できる。

北の平野部は、庄川、和田川、下条川等によって形成された扇状地および沖積平野の東部にあたり、地層は、新生代第三紀沖積層に、砂層、粘土層、礫層が堆積している。この地域は、弥生時代以降、集落および耕作地として主に活用され、その景観は今日においても未だ名残を留めている。

一方南の丘陵部は、射水丘陵の北部にあたり、下条川によって東の太閤山丘陵と西の金山丘陵に分けられる。地層は、新生代第三紀に泥岩・砂岩層によって構成される青井谷泥岩層を基盤として、その上層に礫層と砂泥からなる日ノ宮互層と太閤山火砕岩層が堆積している。この太閤山火砕岩層の風化土は、良質の粘土となり、現在でも瓦の原料として利用されている。この地域には、旧石器・縄文時代から人間が生活していたことが数々の発掘調査によって報告されており、古墳時代は墓域として、奈良・平安時代は鉄および須恵器の生産地として活用されていた。

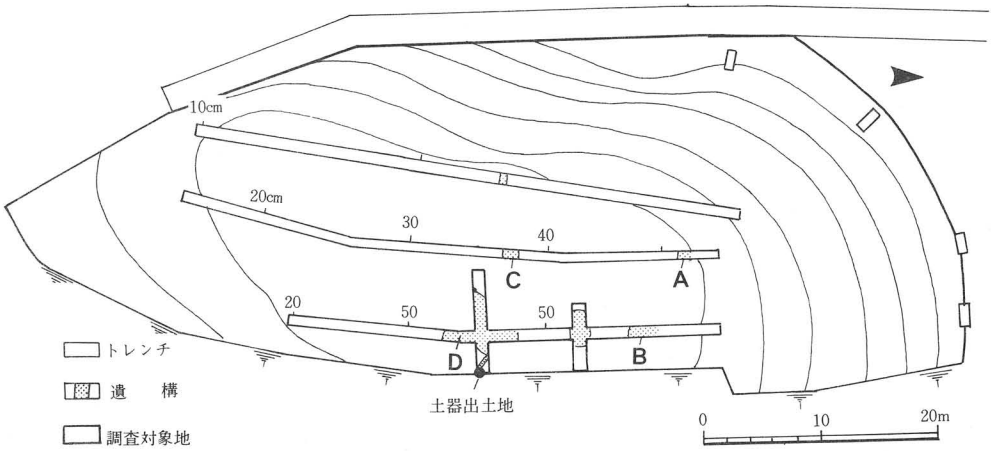
本遺跡の周辺には著名な遺跡も多く、考古学的環境に恵まれている。

標高10ｍ前後の平野部には、中山中・中山南遺跡（縄文・弥生・古墳・奈良・平安）、囲山遺跡（縄文・弥生）、日ノ宮遺跡（奈良・平安）などがある。弥生時代から古墳時代にかけての時期、扇状地の湧水地には集落や墳墓が少なからず点在した。

一方標高15～45ｍの段丘上や丘陵上には、五歩一古墳（古墳）、変電所西古墳（古墳）、上野赤坂Ａ遺跡（旧石器・古墳・奈良・平安）、石太郎Ｃ遺跡（旧石器・奈良）、南太閤山Ⅰ・Ⅱ遺跡（縄文・弥生・古墳・奈良・平安）、小杉流通業務団地内遺跡群№３・６・７遺跡（縄文・古墳・奈良）などがある。また、平成２年に国指定遺跡となった小杉丸山遺跡（飛鳥～白鳳の瓦陶兼業窯・工人集落跡／縄文・弥生・古墳・飛鳥～白鳳・奈良）なども立地している。古墳時代には、丘陵の頂上付近に古墳が多く点在し、奈良・平安時代には、丘陵の谷間に須恵器窯や製鉄用の木炭を焼いた炭焼窯、製鉄炉やこれらの職種に従事していた工人の集落が数多く点在していた。

（荒井）

第2図　遺跡と地形



Aの土層	Bの土層	Cの土層	Dの土層
0～30cm　盛土	0～40cm　盛土	0～20cm　盛土	0～30cm　盛土
30～50cm　表土	40～65cm　表土	20～40cm　表土	30～50cm　表土
50～80cm　黒褐色土	65～75cm　黒褐色土	40～50cm　黒褐色土	50～80cm　黒褐色土
	75～100cm以上　暗褐色土		80～110cm　黒色土
			110～120cm　暗褐色土

第3図　試掘調査トレンチ概略配置図

Ⅲ　調査の概要

1．確認調査

調査は、第一期工事にかかるもので、未造成で残る伐採後の丘陵斜面３箇所において、遺跡の所在確認を平成元年９月25日・26日の２日間にわたって実施した。調査方法は重機を用い約１ｍ幅の溝掘りを地山の黄褐色土まで行った。しかし、残された斜面からは古代の炭焼窯跡等の遺構は確認されなかった。

2．試掘調査

調査は、第二期工事にかかる遺跡東側部分の約1,700㎡を対象として、遺跡の内容や状況を把握することを目的に、平成２年12月８日に実施した。調査方法は、重機を用い、約１ｍ幅の試掘溝を地山の黄褐色土まで掘り下げ、遺構・遺物の有無を確認した。発掘面積は、約150㎡である。

遺跡の層序は、丘陵上に厚さ20～40㎝の工事による盛土があり、その下にⅠ層表土の褐色土（10～20㎝）、次いでⅡ層の黒褐色土（０～20㎝）が堆積し、Ⅲ層の黄褐色土に至っている。

遺構は、丘陵上の高まりを中心に存在しⅢ層の黄褐色土上面において確認した。その広がりは、東西20ｍ、南北約30ｍの範囲からで、黒褐色土の覆土をもつ穴や幅数十㎝から1.5ｍの溝を検出した。出土遺物は、ハケメ調整を内外面に施した茶褐色の土器１点が溝上面から出ている。この土器の時期ははっきりしないが古墳時代かと思われた。

また、遺構が集中する丘陵上の平坦部北側（図のＡ・Ｂ間）では、Ⅲ層の黄褐色土面への勾配が南側からの平坦な状態から急に深くなり勾配を増すために、黒褐色土や暗褐色土が厚く堆積していた。これらの遺構の広がりは、東側の崖状の掘削面まで及んでおり、地形図に示されるように東側に伸びた丘陵上の平坦面に本来存在していたことが、地形や遺構の性格等から考えられる。なお、先の確認調査時には、崖状の掘削面まで削平が及んでいた。　（上野）

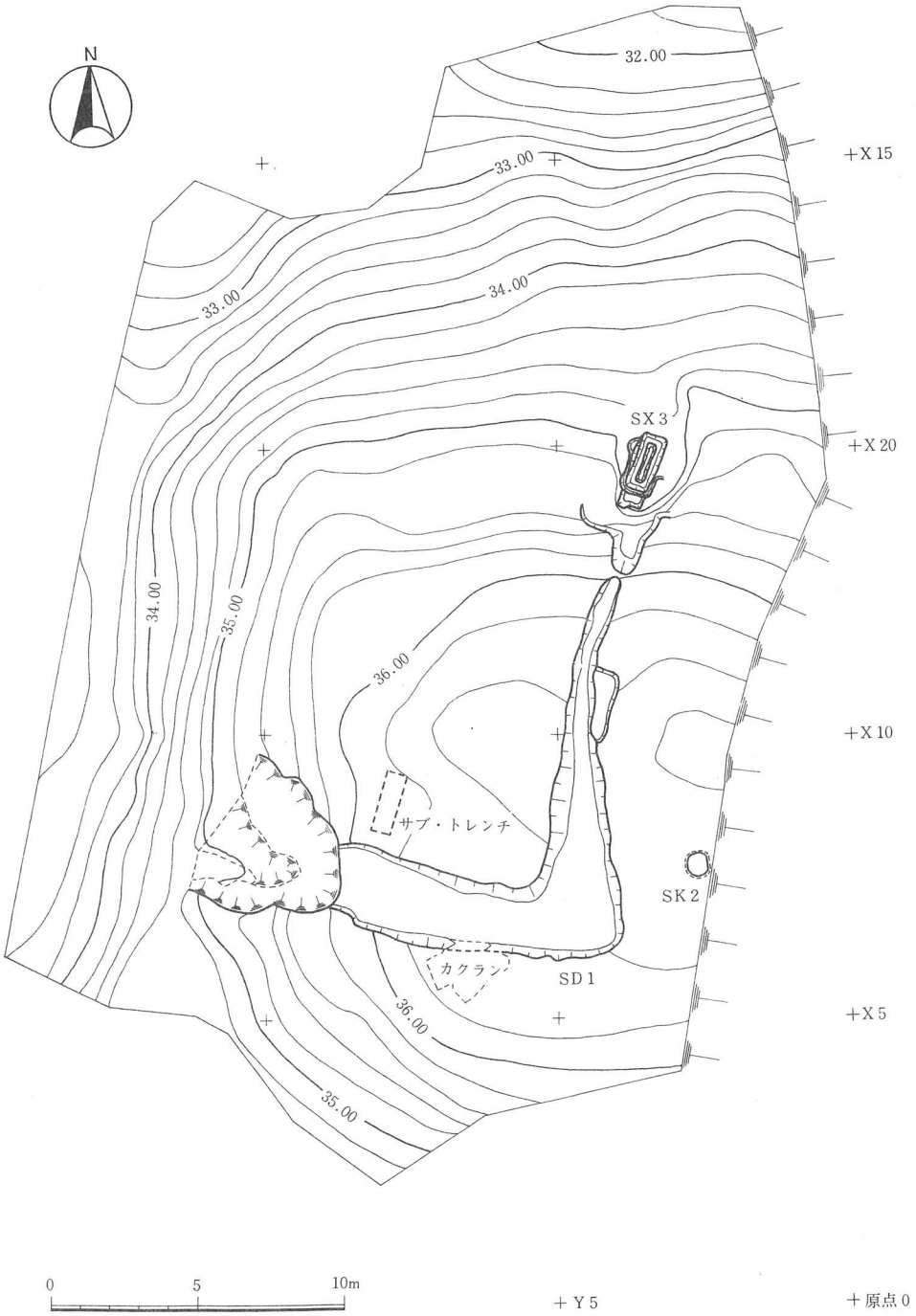
3．本 調 査

調査は、第二期工事にかかる約1,700㎡のうち、試掘調査で遺構が確認された東側の約900㎡を対象として、平成３年６月10日から６月26日まで延べ17日間にわたって実施した。当初調査対象面積は約500㎡であったが、ＳＤ１、ＳＸ３が検出された時点で方形周溝墓の可能性が出てきたことから、対面の溝を捜す目的で、約900㎡まで調査区を拡張した。

調査方法は、重機を用いて表土排除を行った。最初は第Ⅰ層の盛土のみを排除したが、空き缶やビニールなどのゴミだけが検出されるばかりで、遺構を検出できるような状況ではなかった。それでさらに第Ⅱ層の黒褐色土及び一部Ⅲ層も排除した。

プラン確認時の検出遺構数は、穴３基と２基の穴を結ぶ細長い溝１条であった。ＳＸ３は、ＳＤ１の延長を捜す目的で、掘り下げを進めていた過程で発見されたものである。

グリッドは10ｍ×10ｍの方眼を用い、遺物は遺構ごとに検出した。　（荒井）


N
32.00
33.00
33.00
34.00
34.00
35.00
36.00
36.00
35.00
SX 3
SK 2
SD 1
サブ・トレンチ
カクラン
+X 15
+X 20
+X 10
+X 5
+Y 5
+原点 0
0
5
10m

第 4 図　検出遺構

Ⅳ　検出された遺構と遺物

1．遺　　構

検出された遺構は、溝１条、穴１基、不明遺構１基である。いづれも丘陵の頂点付近、調査区の東側に片寄って検出されており、標高34.8ｍ以下の所では遺構は確認されなかった。

ＳＤ１（第５図）　Ｘ６～12Ｙ３～８グリッドで検出したＬ字型の溝。幅は西端付近で最も広く、コーナーはほぼ直角に曲がり、北に向かって狭くなっていく。X12Ｙ３グリッド内で一度途切れ、40cm先の所から再び現われてラッパ状に広がる。その延長上にＳＸ３が検出される。しかしＳＸ３以北には遺構は検出されない。西端の延長は自然の落ち込みとなっており、遺構らしきものは検出されなかった。最大幅218cm、最小幅50cmを計る。

深さは、西端付近からコーナー付近まで40cm前後とほぼ均一になっており、コーナー付近で最も深く45cmを計る。しかしコーナー付近から北へ向かって徐々に浅くなっており、X12Ｙ４グリッドの所で10cmを計り、さらに浅くなってX12Ｙ４グリッド内で消える。40cm先の所から再び現われ、徐々に深くなって北側の斜面で途切れる。

Ｘ６Ｙ７グリッド内の褐色土中（セクション図の第④層）から古式土師器（壷）が１点、Ｘ８Ｙ４グリッドから土師器片が若干量、Ｘ７Ｙ５グリッド内の黒褐色土中（セクション図の第①層）からは土師器片（杯）が１点出土している。

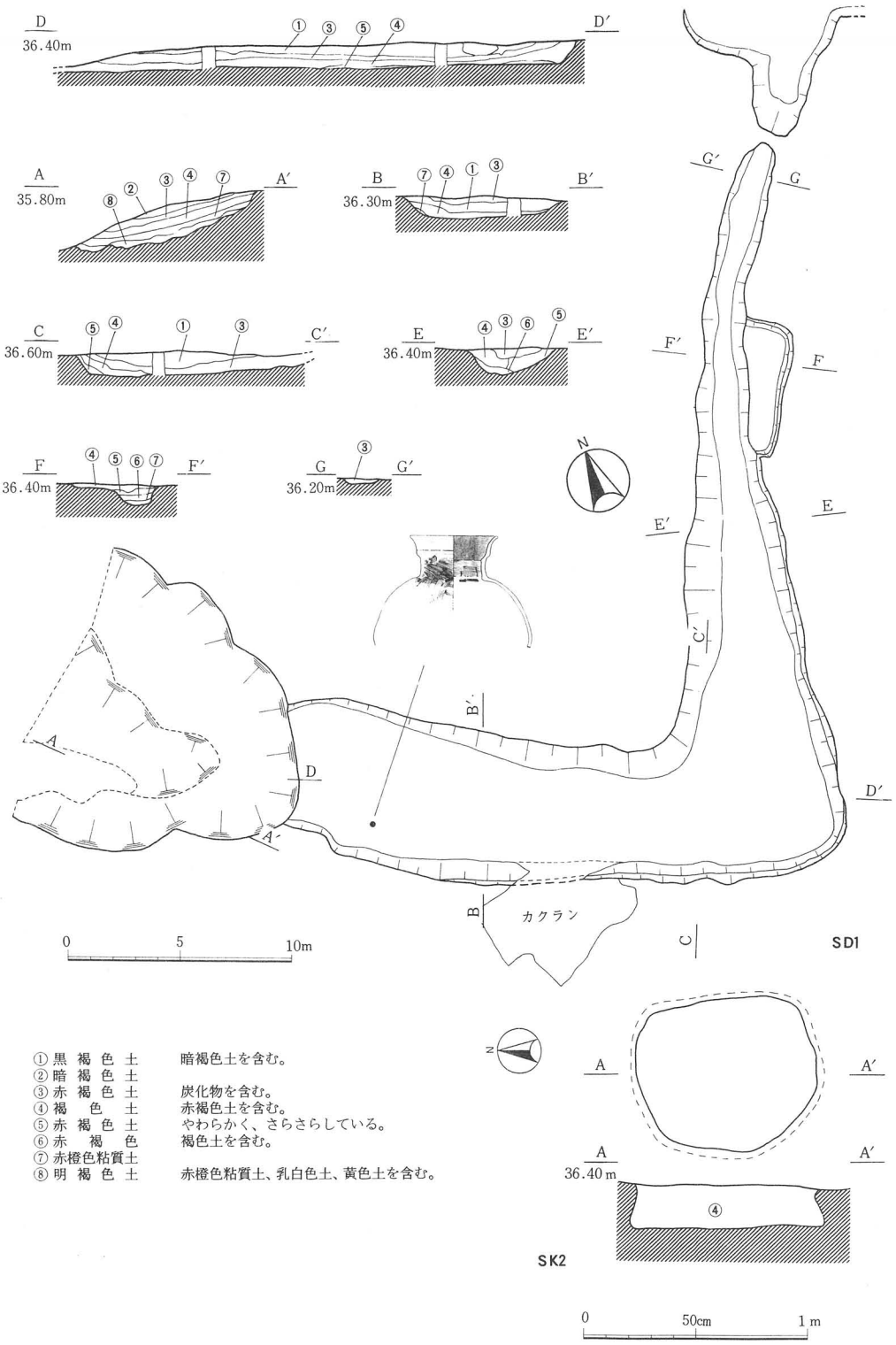
ＳＫ２（第５図）　Ｘ７Ｙ２グリッドで検出した楕円形の穴。長径83cm、短径68cm、深さ19cmを計る。上端の径よりも下端の径の方が長く、断面形は台形状を呈する。出土遺物はない。

ＳＸ３（第６図）　X13～15Ｙ３グリッドで検出した不明遺構。長方形が三重に重複した形態を呈する。一段目の掘り込みは、南側のおよそ半分しか確認できなかった。形態は南北に長い隅丸方形を呈していたと思われ、長軸は上端で235cm、下端で213cmはあったと考えられる。短軸は上端で117cm、下端で108cmと推定され、計測可能な所で、上端の幅が113cm、下端の幅が105cm、深さ44cmを計る。南側には40×83cm（上端）の四角い張り出し部分を伴う。

二段目の掘り込みは、コーナーが直角に近い、南北に長い長方形であり、西側の壁面が崩れた形を呈する。長軸は上端で199cm、下端で173cmを計る。短軸は崩れた部分を含めると上端で99cm、崩れた部分を含めないと上端82cmを計り、崩れる前の短軸の幅は88cm前後と推定される。短軸の下端は55cm、深さは44cmを計る。

一段目の掘り込みも二段目の掘り込みも、上端に関しては、長軸と短軸がほぼ２：１の比率で掘り込まれている。

三段目の掘り込みは、コーナーが不明瞭な、北側がやや膨らんだ形の、南北に細長い隅丸方形を呈する。長軸は上端で144cm、下端で134cmを計り、短軸は上端で24cm、下端で18cmを計る。最大幅は上端で33cm、下端で23cmを計り、深さは７cmを計る。短軸付近から南に向かって幅はほぼ均一となり、短軸が最小幅を兼ねる。三段目の掘り込みは、二段目の掘り込みに伴うもの

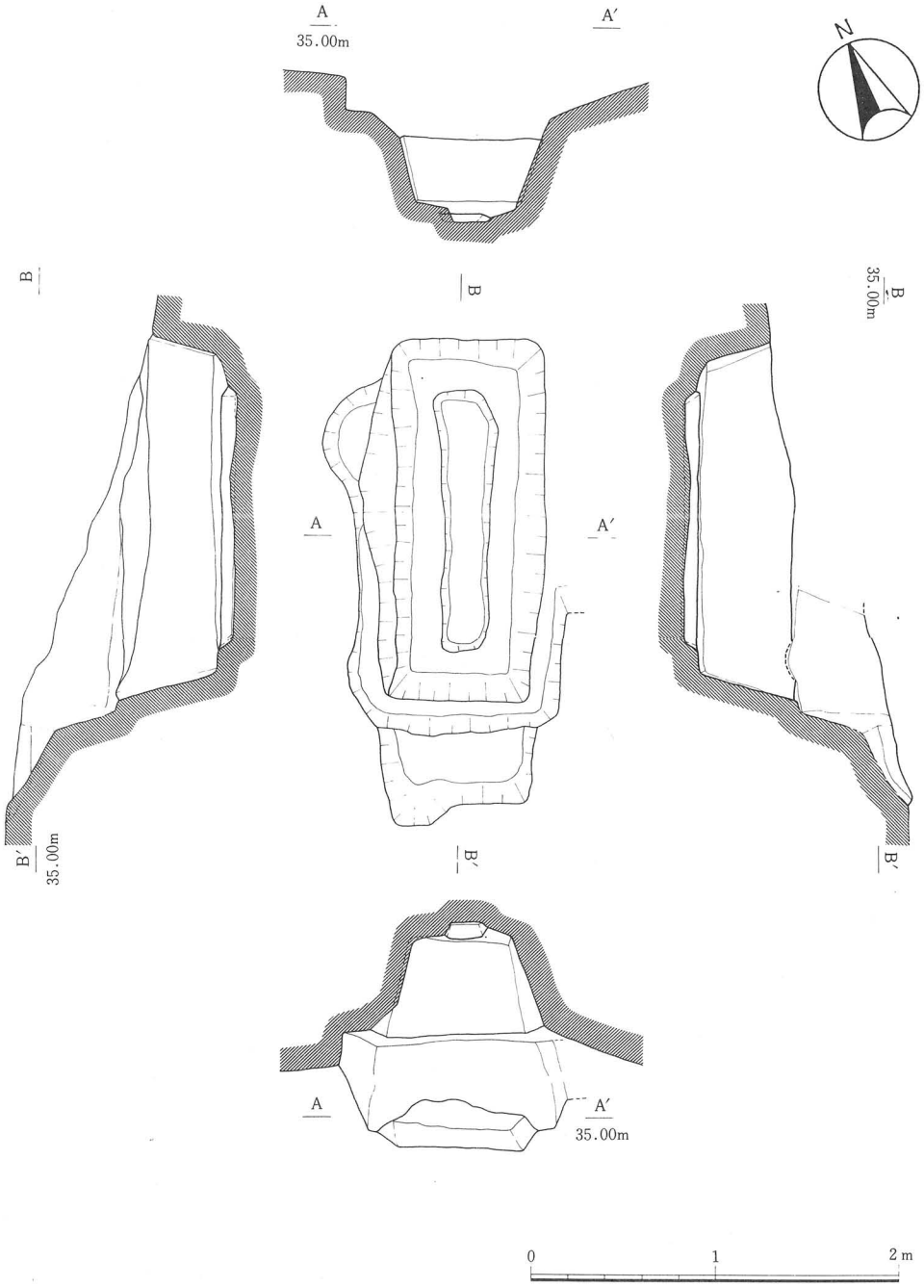


①黒褐色土	暗褐色土を含む。
②暗褐色土	
③赤褐色土	炭化物を含む。
④褐色土	赤褐色土を含む。
⑤赤褐色土	やわらかく、さらさらしている。
⑥赤褐色	褐色土を含む。
⑦赤橙色粘質土	
⑧明褐色土	赤橙色粘質土、乳白色土、黄色土を含む。

第5図　SD1, SK2実測図

と思われ、木棺墓の棺座の掘り込みの可能性が考えられる。

なお、覆土を洗浄したが、遺物は検出されなかった。　（荒井）



第6図　ＳＸ３実測図

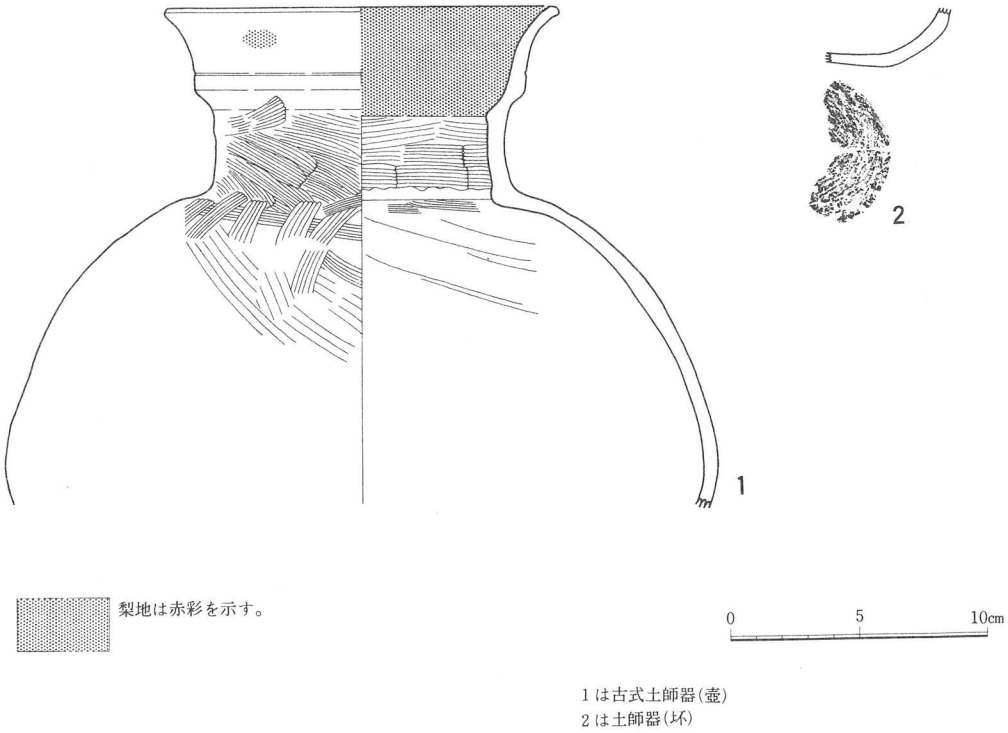
2．遺　物

検出された遺物は、古式土師器壷（第７図の１）１点と土師器片が若干量、土師器杯（第７図の２）が１点である。いづれもＳＤ１から出土したもので、ＳＫ２およびＳＸ３からは遺物は検出されなかった。

１は、第④層（第５図）、褐色土中から出土した。法量は、口縁径が15.6cm、残存器高が19.8cmを計る。器形は有段口縁壷で、頸部は、肩部からやや内反気味で直立し、口縁部は稜をもって外反する。胴部の中位をもって最大径（28.3cm）をとり、総体的に球形を呈すると思われる。整形は、頸部から肩部にかけて細かく、胴部は粗く、右下から左上に向かって斜めに細かなハケメ調整が行われている。再度肩部は縦に荒いハケメ調整が施されている。内面は、頸部から胴部にかけてハケメ調整が施された後、肩部から胴部にかけて横にヘラナデ（木ロナデ）が行われている。胎土は砂粒および石英を含み、色調は淡褐色を呈する。口縁部の内外面に赤彩痕を残すが、剥離によりその範囲は限定できない。焼成は良好である。

２は、第①層（第５図）、黒褐色土中から出土した。法量は、残存器高が2.4cm、底径が推定で7.0cmを計る。器形は、体部が内反気味となる。摩滅がひどく整形等は明瞭ではないが、底部に回転糸切り痕を残す。胎土は砂粒を含み、色調は淡褐色を呈する。焼成は良好である。

（荒井）



第７図　ＳＤ１出土遺物実測図

Ⅴ　ま　と　め

本遺跡は、JR北陸本線小杉駅の南東約2.5km、射水丘陵の北端に位置し、丘陵の東端、下条川に面した小丘陵に立地する。標高37ｍの小丘陵はすでに東側を工場造成時に削られた状況であったが、35～36ｍの等高線が方形状を呈することから従来は東西に長い方形状を呈するものと考えられる。

調査の結果、遺構は溝（SD１）１条、穴（SK２）１基、不明遺構（SX３）１基が検出されている。

SD１

残存する小丘陵の頂部西側に検出されている。遺存形状は「逆Ｌ字」を呈し北・西側で途切れるようである。しかし、前述したように等高線は方形状に巡るなど、一体化して考えると方形に巡っていた事も十分考えられ、方形周溝墓としての性格も窺われる。また、周溝部が一巡しない類例は朝光寺原11号でみられ、周溝の対面は自然斜面となっている。さらに、溝の高位部より古式土師器有段の壺形土器もみられる事からも指摘できる。

有段の壺形土器は、まとまって検出され復元時に全て接合できなかったものの、ほぼ一個体分の量である。底部については検出されていない。頸部は直立するものの、稜はシャープでなく、口縁部の開きは余り見られない事などの特徴から月影Ⅱ式と思われる。さらに口縁部内外は赤彩されている事からも方形周溝墓との関連性が大きいと思われる。

SX３

SX３は斜面部の事もあり当初予測されなかったが、SD１の延長を確認する段階で検出されている。SD１の北側延長線上、小丘陵の斜面部に、主軸方向は等高線と直行する形で検出されている。標高は35ｍを計る。掘り方は二段掘り込みで二段目の底部には、さらに長さ144ｍ、幅24cmの細長い掘り込みが見られる。

形態から考えると土坑墓的な様相であり、調査時にはSD１の延長線上に位置する事等から方形周溝墓に併存する土坑墓と思われた。土坑墓の概念からすれば一段目に蓋板を使用した可能性も考えられるが、棺材・目張り用の粘土等の痕跡は認められなかった。二段目底部の長方形の掘り込みは断面「Ｕの字」形を呈し、土坑墓の概念からすれば割り竹形木棺の棺座に該当すると思われる。覆土中の骨片・副葬品は入念に精査したが検出に至っていない為、さらに土坑内の土を洗浄したが伴う遺物は検出されていない。

いずれにしてもSX３は、形態的あるいは構築法において土坑墓として可能性は高いものの、SD１あるいは方形周溝墓との関連性については今一つ明確でない。

小杉流通業務用地内遺跡においても№１遺跡付近は、木棺墓が検出された№17遺跡、県下でも最古の五歩一古墳など弥生時代末～古墳時代前葉に亘り墓域となっている。周辺及び県内では、３ケ所に墓群が並び方形台状墓・方形周溝墓・甕棺墓・土坑墓が検出された小杉町南太閤

山Ⅰ遺跡を始めとし、同町囲山遺跡、上市町飯坂遺跡、杉谷Ａ遺跡、小矢部市樋掛遺跡がその類例としてあげられる。（荒井）

引用・参考文献

ウ　上野　章・押川恵子

1990　大門町埋蔵文化財調査報告　第６集『布目沢北遺跡発掘調査概要』　大門町教育委員会

オ　大塚初重・井上裕弘

1969　「方形周溝墓の研究」『駿台史学24』

ク　久々忠義　1986

「富山県における月影式土器について」『シンポジュウム「月影式」土器について－報告編－』　石川県考古学研究会

コ　児玉真一・池辺元明

1980　若宮・宮田工業団地関係埋蔵文化財調査報告　第２集　『福岡県鞍手郡若宮町・宮田町所在遺跡群の調査』福岡県教育委員会

ス　鈴木敏弘

1977　『原史墓制研究５－方形周溝墓研究その５－「研究史編」東日本』　原史墓制研究会

セ　関　　清・久々忠義・山本正敏・酒井重洋・島田修一

1989　『三谷遺跡・一ツ山古墳群』　富山県埋蔵文化財センター

タ　高倉洋彰

1980　『弥生時代社会の研究』　寧楽社

フ　副島邦弘・佐々木隆彦

1984　『一般国道210　号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第３集塚堂遺跡Ⅲ　Ｅ地区　福岡県浮羽郡吉井町所在遺跡の調査』　福岡県教育委員会

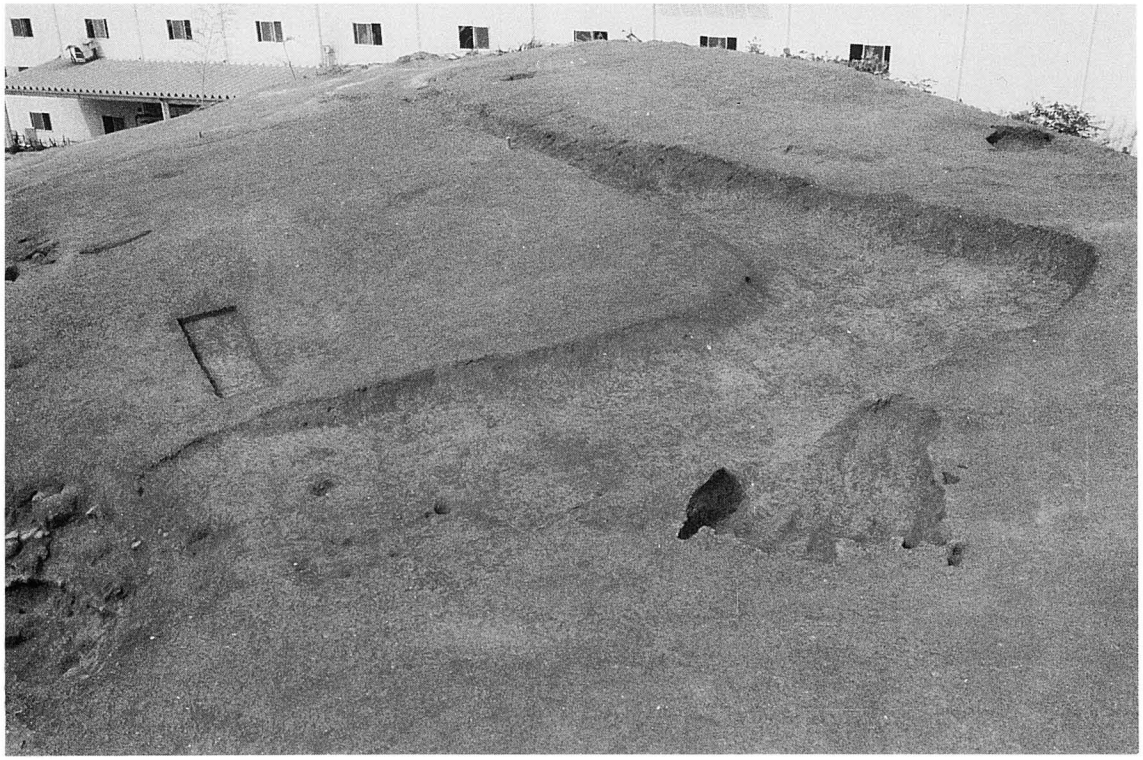
ヤ　八幡一郎・大場磐雄・内藤政恒

1979　『新版考古学講座４－原史文化（上）弥生文化』　雄山閣

八幡一郎・大場磐雄・内藤政恒

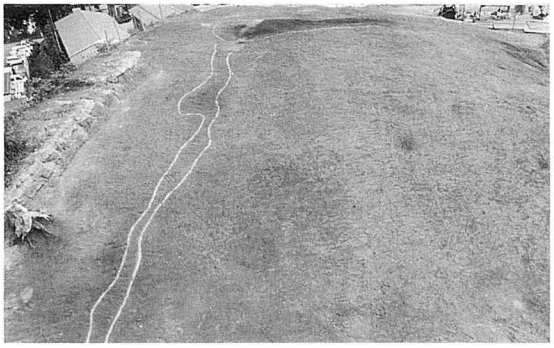
1979　『新版考古学講座４－原史文化（下）古墳文化』　雄山閣

1．調査区全景（北西より）



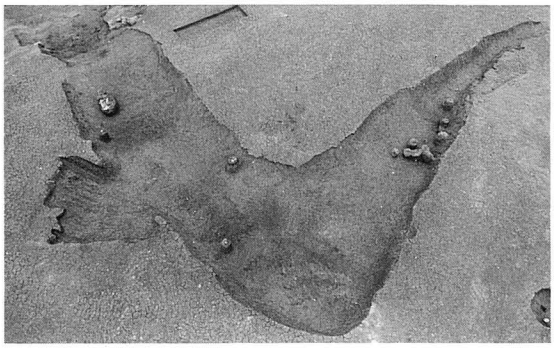
2．調査区全景（南西より）

図版２

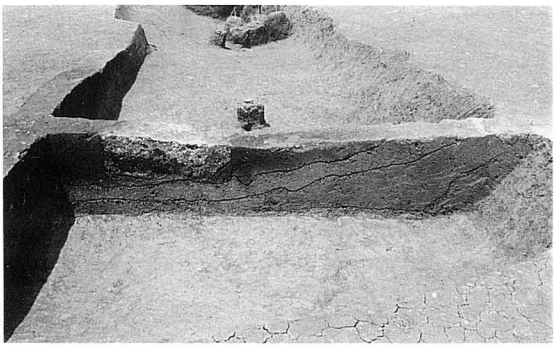


1．プラン確認状況（北より）

2．プラン確認状況（北西より）



3．ＳＤ１遺物出土状況（南東より）

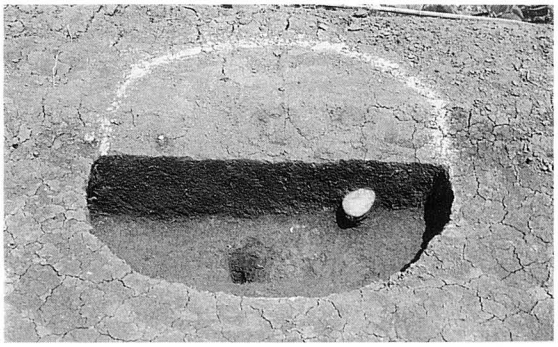


4．ＳＤ１セクションD-D′（南より）

5．ＳＤ１完掘状況（北より）

6．ＳＤ１出土月影式土器（東より）

7．ＳＫ２完掘写真（西より）

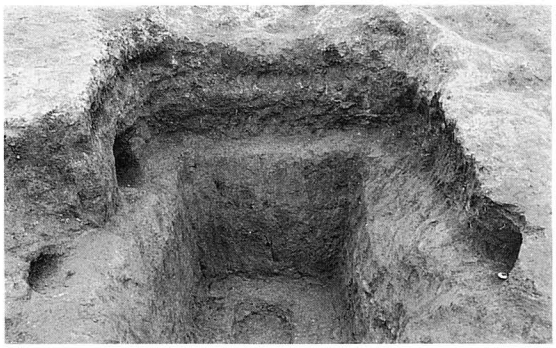


8．ＳＫ２セクション（西より）

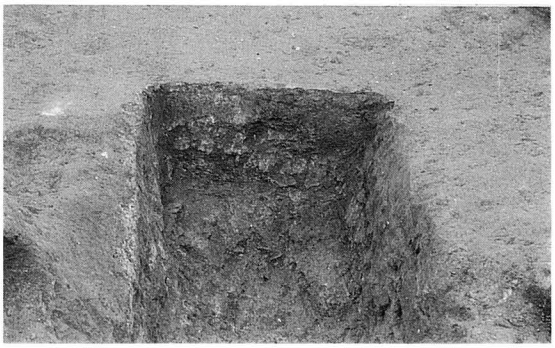
1．ＳＸ３完掘写真（北より）

2．ＳＸ３東側壁面（西より）

3．ＳＸ３西側壁面（東より）

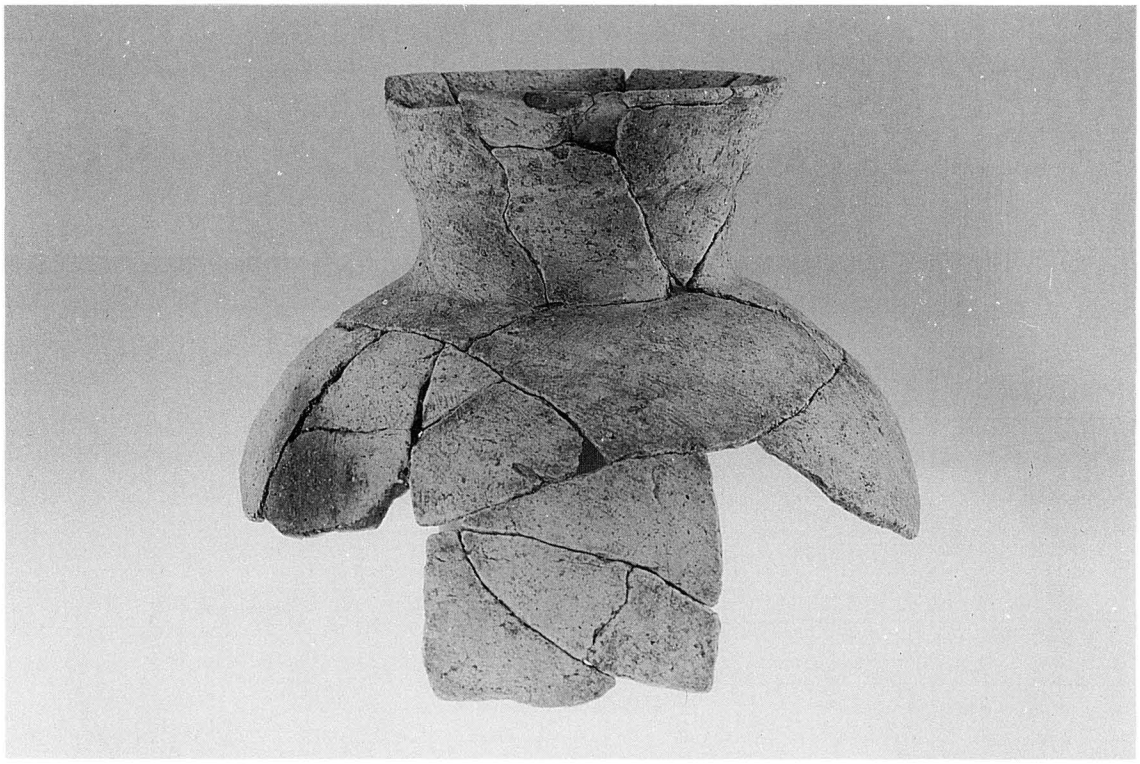


4．ＳＸ３南側壁面（北より）

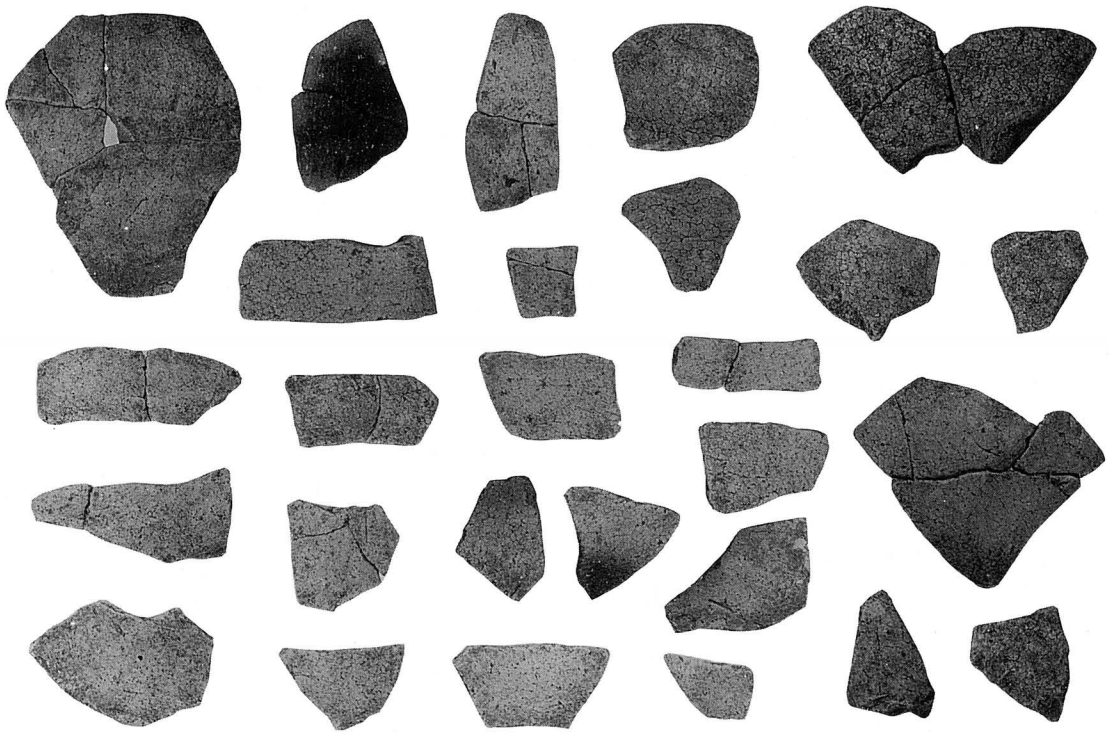


5．ＳＸ３北側壁面（南より）

図版４



1．ＳＤ１出土月影式土器（縮尺約1/3）



2．月影式土器その他の土器片（縮尺約1/3）

小杉町小杉流通業務団地内No. 1 遺跡

編　集　山武考古学研究所

発　行　平成4年3月30日
小杉町教育委員会

印刷所　㈱文化総合企画
TEL 0476-24-1563